海外研究動向／韓国

韓国における言論学研究の動向：2018 年度

小 林　聡 明*

はじめに

本稿は、韓国の主要学術誌に掲載された論文の概要を紹介することで、メディア、ジャーナリズム、コミュニケーション領域から構成される韓国における言論学研究の動向について素描するものである。ここで取り上げる主要学術誌は、例年通り、『韓国言論学報』（韓国言論学会）、『韓国言論情報学報』（韓国言論情報学会）、『言論と社会』（社団法人　言論と社会）とし、2018 年 2 月から 12 月までの刊行分につき検討する。

本稿では、2018 年度の研究動向に見られるいくつかの特徴について、2017 年度のそれと比較しながら、述べていく。以下、本誌前号で指摘した 2017 年度の研究動向と照応する形で、2018 年度の動向を言及してみたい。(1)

① 時代状況にあわせたタイムリーな課題を設定し、分析を試みている点

2018 年度もタイムリーな課題を設定した研究論文が目についた。前号では、こうしたタイムリーな課題の論文について、「現在の問題に、どのように向き合い、いかに乗り越えていくのか、そして、よりよい未来をつくるためには、何をどのようにしたらいいのか、その処方箋を提示する目的も込められている」と指摘した。今年度も、こうした問題意識や狙いを有する論文が多く見られたものの、依然として単なる現状分析で終わりかねない危うさは、十分に克服しきれていない。とはいえ、現代韓国で社会的な関心が高く、切実な問題となっている青年の雇用や健康被害に関する課題に、果敢に切り込んでいく意欲的な論文も見られた。先述した「危うさ」を克服するための研究活動も確実に蓄積を増していることは、十分に留意しておきたい。

② 研究課題が韓国関連に留まっており、他国のメディア、ジャーナリズムに着目した研究が少ない点

アメリカの公文書を渉猟した研究や、日本でのインタビュー調査をもとにした研究が、いくつか見られたものの、依然として他国の状況への関心は、高いと言えない。

③ 質的、量的調査に基づいて影響を測定しようとする研究が多く見られた点

前年度と同様に、「～に与えた影響を分析する」という研究が、きわめて多く見られた。それは、計量的な分析から質的分析、さらに歴史的な手法に基づいた文献研究にいたるまで広範なテーマに共通して見られた。今年度の掲載論文には、昨年度と比べて、印刷メディアを素材とした言説分析に基づく研究が、比較的多く見られた点も指摘しておきたい。

---

*こばやし　そうめい　日本大学法学部新聞学科　准教授

④　ソーシャルメディアに関する研究が多く見られた点

SNS 関連の研究は、減少していたものの、オンライン・メディア自体への関心は強く見られた。とりわけオンライン動画サービスやオンライン・ターゲティング広告などの新たなメディア状況を踏まえ、それに積極的に対応していこうとする野心的な研究が見られた。前号では、SNS 関連の研究において、「明らかにすべき課題の設定がやや単調になってきている点が気になる」と指摘したが、「単調さ」を乗り越え、韓国の研究者の関心は、「次」に向かいはじめたのかもしれない。

⑤　論文執筆者に修士課程や学部生の名前が見られるようになっている点

この点も昨年度と同様である。前号では、こうした論文執筆者の属性が、学部や大学院教育と、大学の外部評価や世界ランキングと、いかに関連しているのか、そのいくつかの可能性について言及した。日本の当該領域でも研究と教育の有機的な連関は、検討すべき重要な課題と言えよう。

以上、韓国の言論学研究動向が有する、いくつかの特徴について、前年度と比較しながら示してみた。次に、各誌に掲載された論文の概要についてタイトルとともに紹介する。

1.『韓国言論学報』

⑴　第 62 巻 1 号　2018 年 2 月

①　ジャーナリズム・コミュニケーション

「医学専門記事の専門性とマスコミ組織内での業務自立性：二重的職業アイデンティティの戦略的利用」（金ジヒョン、金ヨンチャン、沈ミンソン、朴キホ）は、健康・医療ニュース生産過程で重要な役割を有する医学専門記者が、医師であり記者であるという二重の職業アイデンティティを、どのように構築しているのか、そして、ニュース生産過程全般で業務の自律性を、いかに認識しているのかについて、深層インタビューを通じて解明した。「クラウド・ファンディングのジャーナリズム・コンテンツ特性と成功要因に関する研究：「ストーリー・ファンディング」プロジェクト分析を中心に」（宋ジン、金ギュンス）は、ジャーナリズムの危機の核心である財源と利用者接触の問題について、クラウド・ファンディング方式に注目し、ジャーナリズム・コンテンツの特性および成功要因は、何かというの観点から分析を試みた。「日帝検閲に対する朝鮮語民間新聞の対応様相研究」（李ミンジュ）は、朝鮮総督府の検閲に、朝鮮語民間新聞が、どのように対応したのかについて明らかにした。「我々はいつ、誰に自らの意見を語るのか：論争事案についての意思表現決定要因としての同意可能性の知覚と主張の相対的堅固性」（ジョン・ダウン、ジョン・ソンウン）は、論争を補償と処罰が与えられる社会的ゲームとみなし、論争における成功可能性（相手の同意可能性）を高く知覚するとき、自らの主張が、より強固であると考える相手に意見を表現する可能性が高いことについてを明らかにした。

②　ニューメディア

「スマート・フォン中毒過程に関する研究：認知行動モデルの論議拡張を中心に」（金ヒョンジ、金ソンテ）は、スマート・フォン中毒の問題について、利用者の心理および認知的時限の原因（性

向、利用動機、利用認知）と結果（注意力欠如）をむすぶプロセスから説明した。

③　PR 広告

「企業のリスク・コミュニケーション戦略と、その戦略の活用視点が公衆の顧客基盤ブランド資産および否定的組織―公衆関係性におよぼす影響」（権ジヒョン、金スヨン）は、リスク・コミュニケーション戦略と、その戦略を活用する視点が、公衆の顧客基盤のブランド資産および否定的組織―公衆の関係性におよぼす影響について分析した。「否定的情緒と自己効能感の調節された媒介効果がタバコの警告図の評価と禁煙意図におよぼす影響：挫折感、恐怖、嫌悪感の比較分析を中心に」（崔ユジン、ジョン・スンウ、朴ジュンウ）は、罪悪感や恐怖、嫌悪感のような否定的情緒と喫煙者の自己効能感の調節された媒介効果について、警告図と文言の比較を通じて解明した。

⑵　62 巻 2 号　2018 年 4 月

①　ジャーナリズム、コミュニケーション

「知能情報社会メディア教育政策についての専門家の優先順位認識研究：階層分析過程（AHP）を中心に」（安ジョンイム、金ヤンウン、ジョン・キョンラン、崔ジンホ）は、知能情報社会という社会的、技術的環境変化に対応し、今後の韓国でメディア・リテラシー教育政策の方向を、どのように設定し、いかなる政策的優先順位を考慮しなければならないかについて検討した。「フェイク・ニュースについての認識とファクト・チェック効果研究：既存の信念との一致の有無を中心に」（廉ジョンユン、ジョン・セフン）は、フェイク・ニュースの認識とファクト・チェック効果に影響をおよぼす受容者の心理的メカニズムについて解明した。「国内メディア企業の CSR 認識と実行に関する研究：CSR 業務および研究経験者の深層インタビューを中心に」（禹ヒョンジン）は、韓国の国内企業が CSR を、どのように理解し、実践しているのかについて、CSR 関連業務および研究経験者の深層インタビューを通じて分析した。「科学的客観主義、形式的客観主義、韓国型形式的客観主義：新聞記事に使用された取材源使用と直接引用分析を中心に」（李ナヨン）は、韓国の新聞記事にあらわれた客観主義の慣行について、海外の主要メディアと比較し、韓国の新聞記事の品質を評価することで、韓国言論の現実を診断した。「オンライン・ニュース環境で利用者は、どのようにニュースを選択するのか：ポータル・ニュースサイトで new cue 選択の動機および結果」（崔ジヒャン）は、オンライン・ニュース環境で cue 依存型ニュース処理方式に焦点をあて、ニュース利用者が、オンラインで、どのように cue に期待し、ニュースを選択しているのか、そして、それぞれ異なる cue を利用する原因および結果について明らかにした。

⑶　62 巻 3 号　2018 年 6 月

①　ジャーナリズム、コミュニケーション

「選挙世論調査結果報道の実際傾向と知覚された影響の差異：有権者自身と他の有権者に対するバンドワゴン効果とアンダードッグ効果」（文ジョンヒョン、ジョン・ソンウン）は、選挙世論調査結果報道が、有権者の候補評価におよぼす実際の効果と知覚された効果間の差異を分析した。「公正報道はいったい最高神を志向するのか：カントの倫理形而上学と孔孟思想を通じて見た公正報道の問題点と限界、そして儒家言論学的克服方案」（沈フン）は、現代社会のジャーナリズムが

当為的に追求しなければならない言論の価値とともに、これを実践的に具現するための実践規範について考察した。「ポータルで流通する「単独」報道の累計についての探索的研究：ネイバーを中心に」（ユ・スジョン）は、ポータルの競争が深まるにつれて見られるようになった単独報道の乱用現象について分析した。「党派的ニュースに関する第三者の新たな主要決定要因：望ましいニュースに対する評価、自他間の政治知識の知覚格差、自他間の批判的理解能力の知覚格差」（ジョン・ソンウン、崔ユンジン）は、政治ニュースの他人への影響と自らに対する影響の知覚の差異について分析した。「アルコール依存症関連ニュースであらわれた原因責任と解決責任類型が、偏見と差別におよぼす影響」（チョ・ヘジン、金ジョンヒョン、白ヘジン）は、アルコール依存症への偏見と差別が患者の個人的責任と関連があるという問題意識から、アルコール依存症の原因責任と解決責任の判断が、患者に対する偏見と差別に、いかに影響を与えているのかを明らかにした。「献血要請者の交信力と養成方式が大学生の献血順応に与える影響に関する研究：DITF（一歩後退二歩前進戦略）の適用」（車ドンピル）は、代表的な順応規範の一つである DITF を利用し、献血順応率の増大のための方案について検討した。「宣伝としての図書翻訳：米軍政期アメリカ図書翻訳活動の展開と意味」（車載永）は、解放以後、米軍政期 3 年間にアメリカが韓国で展開した多様な宣伝・文化活動のなかで、特に図書翻訳活動に焦点をあて、それが、どのような歴史的文脈で、いかなるプロセスで展開したのか。そして実際に、どのような性格の図書が、いかなる方式で翻訳出版されたのかについて解明した。

② ニューメディア

「ニューメディア類型がリスク特性、リスク認識、予防行動意図の関係におよぼす影響：条件的過程モデルの検証」（白ヘジン）は、伝統メディアに限定されてきたリスク・コミュニケーション研究を拡張し、ニューメディア類型が、リスク特性、リスク認識、行動意図の関係におよぼす影響を明らかにした。「放送 VOD の持続利用意図についての研究：情報システム持続利用モデルの拡張」（李ヒョンジ）は、放送 VOD の利用を持続させる要因を検出し、モデルを設定することで、それを検証した。

③ 放送、コンテンツ、文化

「地域共同体構成員のコミュニティ・メディア実践についての考察：「チャンシン洞ラジオ＜ダム＞」現場についての参与観察を中心に」（金ヨンチャン、金ドヨン）は、共同体メディア実践について、参与観察と深層インタビューにより、共同体の形成という観点から考察した。「韓国多文化 TV 番組における移住民、外国人の再現：ジャンル別差異と時期別変化」（金チョヒ、金ドヨン）は、韓国のテレビにおける多文化番組について量的分析を実施し、これまでの個別番組分析に埋没してきた多文化番組研究の範囲を拡張とするものであった。

④ PR、広告

「リスクのうわさについての 10 年間の内容分析」（ヤン・ジエ、白ヘジン）は、国家的リスク状況で、メディア報道されたリスクのうわさと政府のうわさの対応戦略を検討し、SMCRE モデルを用いた先行研究を整理したうえで、2008 年から 2017 年までの国内日刊紙で報道されたリスクのう

わさの特性と対応戦略を体系的に分析した。

⑤　理論、方法

「ポスト・ヒューマン言説の思惟と美学的―倫理的力量研究：シモンドンとドゥルーズ、ガタリの人間―機械思惟を中心に」（カン・ジンスク）は、人間と機械の関係設定を中心にして、ポスト・ヒューマンの思惟を検討し、利用者のデジタル力量を定立するための問題設定と方向性を導いた。「メディア文化史の主体、大衆さがし：ミシェル・ド・セルトー＜日常生活の実践＞に関する手稿を中心に」（金ジヨン、金均）は、メディアを通じて歴史のなかで大衆の姿を発見しようとするメディア文化史作業が、「上からの歴史」に留まっている現実を指摘し、セルトーの作業が、こうした限界を克服するのに、どのような理論的、方法論的含意を持っているのかについて指摘した。

⑷　62 巻 4 号　2018 年 8 月

①　ジャーナリズム、コミュニケーション

「2000 年以後、メディアに表現された歴代大統領とファースト・レディ：コンピュータ・テキスト形容詞分析」（朴ジョンミン）は、韓国の歴代大統領とファースト・レディが、メディアで、どのように表現されているのかについて、2000 年以後のメディア報道において、大統領とファーストレディを扱った肯定的、否定的形容詞をコンピュータ・テクスト分析を用いて明らかにした。「メディア法改正過程にあらわれた 18 代国会常任委員会の議事決定に影響をおよぼすコミュニケーション特性研究：議会組織理論、個人維持決定属性、組織コミュニケーション特性、集団思考徴候を中心に」（朴ジョンミン、ジョン・ヨンジュ、権グミン）は、18 代国会・文化体育観光通信委員会のメディア法改正関連の会議録を分析し、法改正過程にあらわれた国会議員の議事決定特性、組織コミュニケーション特性、集団思考属性などが、いかなるものであり、こうした属性と国会議員の個人的属性が、改正案の賛成・反対決定に、どのような影響を与えたのかを明らかにした。「メディア・フレームのオンライン文化的共鳴が世論フレームの構築におよぼす影響関係：金英蘭法関連記事と書き込みについてのテクスト・マイニングおよびグレンジャー因果関係分析を中心に」（李チャンジュ、イム・ジョンソプ）は、オンライン記事の書き込みが、社会文化的文脈で作用し、メディア・フレームが、こうした文脈で呼応する関係性について、「メディア・フレームのオンライン文化的共鳴」として明らかにした。

②　理論、方法

「PM2.5 災害報道のフレーム分析：構造的主題モデル（Strctural Topic Modeling）の適用」（李ジュンウン、金ソンヒ）は、韓国の中央日刊紙の PM2.5 報道の特徴について、内容分析の方法を用いて明らかにした。

⑸　62 巻 5 号　2018 年 10 月

①　ジャーナリズム、コミュニケーション

「ニュース過剰知覚とニュース利用の関係：先行要因と対応戦略を中心に」（金ギュンス、李ソン

ギョン、高ジュン）は、ニュース利用者の知覚が、ニュース消費と、どのように繋がっているのかについて検討した。「パニック障害についてのメディア報道の内容分析：有名人情報源の役割についての再照明」（金リュウォン、ユン・ヨンミン）は、パニック障害に焦点をあて、最近7年間のパニック障害に関するオンライン・ニュース記事を量的内容分析によって検討した。「気候変化についての脅威情報の追及および処理研究：情報源の信頼度、講堂に対する態度、認知された情報収集能力の調節効果中心」（金ヨンウク、金ヨンジ、金スヒョン）は、気候変化のリスクに関する情報が、どの程度追及され、いかなる方式で処理されるのかについて、リスク情報・処理（RISP）モデルを用いて分析した。「1920年朝鮮語民間新聞創刊の背景と過程」（朴ヨンギュ）は、朝鮮総督府が朝鮮語民間新聞の発行許可を決定した背景と、その理由を明らかにし、新聞発行許可を申請した朝鮮人の特性と目的について整理した。そして、朝鮮総督府が朝鮮語民間新聞の発行を許可した結果とそれへの朝鮮人の認識と評価の分析を試みた。「ベトナム移住女性の共同体メディア参加が文化的市民権構築におよぼす影響：釜山地域＜ベトナムの声＞ポッドキャストのケースを中心に」（チョン・ウィチョル、ジョン・ミヨン）は、コミュニケーション権について、情報共有、文化的生存、共同体構成と連帯、アイデンティティと信念の表現などのための権利を意味する「文化権」を包括する市民権の核心ととらえ、ベトナム移住女性が母国語で製作した「ベトナムの声」（Tieng Noi Viet）ポッドキャストに注目して、分析を試みた。

② ニューメディア

「青少年のスマートフォン依存度と影響変因の関係についての学齢および性別比較分析：父母の養育態度、青少年の心理的特性、スマートフォン利用用途を中心に」（李ハナ、梁承穆）は、韓国青少年政策研究院の2016年の児童・青少年パネル調査データを利用し、青少年のスマートフォン利用用途が、スマートフォン依存度におよぼす影響について、父母の養育態度、青少年の心理的特性とともに統合的に分析し、学齢および性別による差異を検証した。

③ 放送、コンテンツ、文化

「新自由主義広告の神話と進化：現代カード広告の他者性回数戦略研究」（金ジヨン）は、2000年代の韓国社会が直面する新たな資本主義、新自由主義の条件下で、広告テクストの神話が、どのように作動するのかについて、新自由主義的資本主義の代表的な金融商品であるクレジットカードの広告テクストの記号戦略を通じて明らかにした。「映画投資・配給社の社会ネットワーク中心性と興行性についての研究：2007－2017年終端分析を通じた段階別力学関係を中心に」（黄ヨンソク、ノ・ヘリョン）は、韓国映画の投資・配給社が制作生態系社会ネットワークに示す位置（中心性）が、興行実績に、どのような影響をおよぼすのかについて、2007年から2017年まで時期を対象として、確率効果モデルを用いて分析した。

④ PR、広告

「心理的距離感による責任帰属が危機対応戦略の効果におよぼす影響」（南宮ミン、朴ヒョンスン）は、既存の危機管理研究において、広く用いられてきた状況的リスクコミュニケーション理論（SCCT）の限界を補完するための議論を試みた。「大学のPRと大学生の学業成就：大学―学生関

係性、教育内容の質、自我効能感、学業熱意の影響力を中心に」（ユ・ソンウク、朴ヘヨン）は、大学組織と大学生の効果性指標といえる学業成就を成し遂げる先行要因を究明し、その関係性を大学の PR の観点から考察した。

2.『韓国言論情報学報』

⑴　第 87 号　2018 年 2 月

「公営放送ニュースに照らし出された大統領：盧武鉉・李明博・朴槿恵大統領在任期間のメインニュースプログラムの内容分析」（カン・ヒョンチョル、沈ジェウン、呉ハヨン）は、KBS と MBC の二つの公共放送が、権力の核心である大統領を、どのように報道しているのかについて、放送されたニュースの内容分析を行うことで明らかにした。「青年世代の代案ジャーナリズムの実践と構造的制約：インターネット言論＜ GOHAM20 ＞の事例を中心に」（金ソンギ）は、インターネット言論＜ GOHAM20 ＞を事例として、「青年世代―代案言論―デジタル技術」の結合に注目し、急変するメディア環境のなかで、青年らの代案ジャーナリズム実践が、どのような新たな構造的制約に直面しているかについて明らかにした。「インターネットと精神管理権力」（朴スンイル）は、精神的な能力と活動を技術的合理性の体系によって、特定の方向と形態をとりむすぶ権力のベクトルを「精神管理権力」と命名し、それについて生命管理権力と統治性、一般知性という概念との接合と対決を通じて分析した。「脱北民プログラムと‘情動（affect）’の政治：メディア文化研究拡張のための試論」（パン・ヒギョン、朴ヘヨン）は、受容者の喚起された情動が、北朝鮮に対する「恐怖」と「幻滅」、「同情」などの感情に翻訳されるものについて分析した。「ニュースリテラシー教育の短期効果研究：中・高生対象示範授業および教育評価事例を中心に」（ヤン・ジョンエ、金ギョンボ）は、現代市民に重要な力量になっているニュース・リテラシーを中等教育課程に本格導入するうえで必要な基礎資料を提供するために、実際の学校現場で中高生を対象として、関連する教育と評価を行った。「中国の TV とオンライン動画サイト間競争に関する研究―韓国映像コンテンツ利用動機の要因を中心に」（チョ・リム、ユ・セギョン）は、中国における韓国映像コンテンツ流通のプラットフォームであるテレビと、新たなメディア・プラットフォームであるオンライン動画サイト間の競争状況について分析した。「1950 年代米国務省の米国言論専門家派遣事業研究：韓国言論に与えた影響を中心に」（車載泳）は、1950 年代中盤以降、米国務省が、教育交流プログラムの一環として行われたアメリカ言論専門家派遣事業の内容と成果、そして、それが韓国言論に与えた影響について分析した。

⑵　第 88 号　2018 年 4 月

「韓国記者らの理念性向と理念性向に影響を与える要因：韓国の言論人意識調査を中心に」（南ジェイル、李カンヒョン）は、韓国の記者の政治理念性向の分布と政権別変化の推移および理念性向に影響をあたえる要因について、盧武鉉政権、李明博政権、朴槿恵政権における相違に注目して分析した。「ゲーム言説の地形内における大衆言説の位置：ゲーム生産者の伝記物分析を基盤に」（パン・ヒギョン、ウォン・ヨンジン、金ジンヨン）は、ゲーム言説の地形が、専門家中心の言説で構成された際、大衆言説を排除してきたという限界を指摘し、その限界を克服するために、大衆言説を発掘し、内容分析をしたうえで、それらが、ゲーム言説の地形で、どのような位置をしめて

いるのかについて明らかにした。「オーバーツーリズム（overtourism）の前兆現象と警戒：済州言論の‘済州の人々の生’を振り返る」（李ソヒョン）は、韓国の言論が、グローバルな問題として浮上する「オーバーツーリズム」を、どのように規定しているのかを明らかにし、済州地域のツーリズム実態について分析した。「韓国言論の政治偏向性格に関する研究：19代大選報道分析を中心に」（金スジョン、ジョン・ヨング）は、韓国社会における新聞放送媒体の政治的バイアスを区分するために用いられている進歩／保守の二分法が適切なのかについて検討した。「文化コンテンツ事業支援政策改善方案研究：段階別支援政策に対するデルファイおよび階層分析過程を中心に」（崔ジンホ、権ホヨン）は、文化コンテンツ産業支援政策の方向について検討するために、コンテンツ産業関連の専門家認識を調査した。「反民特委に対する＜東亜日報＞と＜朝鮮日報＞の報道態度」（チェ・ベク）は、反民族行為特別調査委員会（反民特委）の運営過程で、言論は、どのような役割を行ったのかについて明らかにした。

⑶ 第89号　2018年6月

「オンライン・ターゲティング広告の受容に影響を与える要因研究：知覚された個人化、有用性、プライバシー念慮、侵入性を中心に」（金ヨンウク、金ヘイン、ユン・ソヨン）は、オンライン・ターゲッティング広告受容に影響を与える要因間の関係について分析した。「＜キム・ジェドンのTALK TO YOU―心配しないで　あなた＞（JTBC）に表れたヒーリング言説の特性に対する批判的考察」（朴ジヒョン、黄インソン）は、最近、韓国国内のヒーリン番組が有する言説の特性に注目し、JTBC＜キム・ジェドンのTALK TO YOU―心配しないで　あなた＞にあらわれたヒーリング言説の特性を中心に、オーディエンスの問題と葛藤について批判的に分析した。「社会技術的想像体としての原子力とメディア言説：光復以後民主化に至るまでの言論報道を中心に」（チュ・ジェウォン）は、原子力エネルギーが導入された食の韓国社会で、原子力エネルギー言説を形成してきたメディア報道を分析し、どのような特定の言説が、いかなる文脈で生産され、それを通じて、特定のフレームが形成されたのかについて、韓国の主要日刊紙5紙の記事を分析することで明らかにした。「新聞配達組織の荒廃化と販売市場の歪曲：販売担当者の深層インタビューを中心とした質的研究」（韓ソン）は、新聞販売市場の構造と市場行為に参与する行為主体の力学関係を把握し、韓国の新聞販売私情の構造的矛盾と問題点について、新聞社の販売担当者と配達組織運営者へのインタビューを通じて明らかにした。「朴槿恵弾劾ろうそく集会の民主的含意：熟議民主主義とモニタリング・デモクラシーを中心に」（洪ソング）は、熟議民主主義とモニタリング・デモクラシーを土台とし、「民主主義の危機診断」「政治参与」「公論場と言論」などの次元で、朴槿恵弾劾ろうそく集会が内包する民主的意味について考察した。

⑷ 第90号　2018年8月

「社会運動の観点から政策ガバナンスの現状を読む：青年当事者運動の政治的機会構造分析を中心に」（金ソンギ、オク・ミエ、イム・ドンヒョン）は、社会運動論の観点から、市民社会の積極的な政策ガバナンス参加についての補充的な視点を提供した。「我々の世代、幸福の倫理：#MeToo運動の一起点から」（金イェラン）は、幸福の倫理を考察し、幸福の情動の観点から一つの政治倫理的価値を導き出した。「SNSを基盤としたPM2.5予防行為意図決定要因に関する研究：SNS利用

者らを中心に」（ユン・スンウク、チャン・ジュンガプ）は、深刻な環境問題となっている PM2.5 についての公衆の知識、SNS 関連情報源の信頼性、知覚された障害、知覚された深刻性、意見認識および予防行為意図の関係を分析することで、PM2.5 の予防行為を高められる方案について提示した。「大規模地域開発事業の葛藤問題についてのニュース属性議題の構成方式に関する研究：済州第二空港建設と吾羅観光団地造成事業を中心に」（李ジヒョン・高ヨンチョル）は、メディアの属性議題設定機能効果に注目し、済州地域で対立する問題となっている「済州第 2 空港建設事業」と「吾羅観光団地造成事業」に関する地域日刊紙の意味構成方式を明らかにした。「AI はなぜ女性の声なのか？：音声認識装置テクノロジーとジェンダー化された声」（李ヒウン）は、人間の声を具現する技術を検討することで、人間と機械の関係について文化的な観点で考察した。「広告費支援の媒体別競争に関する研究：地上波 TV、ケーブル TV、オンライン動画サービスを中心に」（ジョン・ユジン、ユ・セギョン）は、2015 年から 2017 年の広告費用を業種別、規模別に区分し、地上波 TV、ケーブル TV、オンライン動画サービス間の競争状況と方向について分析した。

⑸　第 91 号　2018 年 10 月

「注文型ビデオ（VOD）利用動機、利用行為、満足感研究」（クム・ヒョンス、金ジョンギ）は、新たなメディア利用行為を主導する VOD の利用動機と利用行為および満足感について検討した。「‘他者の苦痛に対する応答’としてのコミュニケーション、そして言論の役割：セウォル号惨事についての言論報道を中心に」（南グンヒョプ）は、コミュニケーション概念を他者との倫理的観点から、その意味の地平を拡張し、これを土台にして言論の存在論的当為とは、何かについて批判的に考察した。「アイドルの感情労働（affective labor）と労働倫理：リアリティーオーディションショー＜プロデュース 101 ＞を中心に」（パン・ヒギョン、呉ヒョンジュ）は、感情労働概念を手がかりとして、リアリティ・オーディション・ショー＜プロデュース 101 ＞に示されたアイドル練習生の労働と、彼ら・彼女らに強調される労働倫理について検討した。「子どもたちの ICT リテラシーに関するメディア言説の批判的検討：2000 年代以後の新聞記事分析を中心に」（ピョン・ヒョンジョン）は、子ども ICT リテラシーについて「東亜日報」「ハンギョレ」2 紙の記事分析を通じて、2003 年から 2014 年までの言説的地平変化を明らかにした。「国家災難事故に対する東・西洋の記者らの記録と解釈方式：文化心理学的理論を基に探った韓国とアメリカの記者らの認知比較」（李ワンス、朴ジェヨン、シン・ミョンファン、ジョン・ジュヘ）は、韓国とアメリカの記者が類似した国家的災難事故を、どのように異なる認知方式で記録し、解釈するのかについて、文化心理学的理論を用いて比較分析した。「社会政治的生命体論と社会関係の性格：北韓言論文化の背景に関する一考察」（李ユンボク）は、血縁的関係と規定される首領、党、人民大衆の関係が、事実上、擬制的である点に注目し、金日成、金正日が社会政治的生命体論の概念を直接提示した演説および談話文を中心に社会政治的生命体論にあらわれた社会関係の性格について検討した。「交通放送の方向性と交通リポーターの役割変化に関する Q 研究：TBS ラジオを中心に」（李ジヘ、金ジョンヒョン）は、韓国の交通放送（TBS）と交通リポーターの役割が、どのように変化したのかについて、TBS 放送従事者の認識類型と特性に焦点をあてて分析した。「地震危険情報の累計による公衆の反応研究：感情の媒介効果と文化的世界観の調節効果中心」（イム・インジェ、金ヨンウク）は、地震被害情報に注目し、弁別性を有したメッセージが、どのように感情と予防および回避行動

に影響を与えるのかについて考察した。「健康関連対人コミュニケーションと経済水準が身体的精神的健康増進行為に与える影響：客観的および主観的経済水準を中心に」（ジョン・リョホン、ソ・ミヘ）は、経済水準を個人の客観的・主観的経済水準と個人が居住するコミュニティの経済水準とに区別し、多様な次元の経済的要因が、個人の身体的、精神的健康に、どのように影響を与えているのかについて分析した。「在韓中国留学生の留学動機と文化資本としての取得学位の価値研究」（黄ギョンア、洪ジア）は、文化資本である学力資本が、階級形成と資源の分配におよぼす影響について、在韓中国人留学生を事例として分析を試みた。

⑹ 第92号 2018年12月

「PM2.5対応行動促進のためのメッセージ構成戦略探索：心理的距離感の調節効果および不安感情の媒介効果を中心に」（金ヨンウク、李ハナ、金ヘイン、ムン・ヒョンジ）は、PM2.5リスクメッセージが、個人の対応行動におよぼす影響力を検証した。「公論場としての地域放送と地方選挙報道：大田・世宗・忠南地域事例分析」（金ジェヨン、ヤン・ソンヒ）は、地域放送の公論場が有する機能を明らかにするために、大田・世宗・忠南を放送エリアとする地上波放送3社のメイン・ニュースが、どのように6・13地方選挙を報道したのかについて分析した。「ヒューマン・ドキュメンタリーが再現する青年らの生と危機：EBSドキュプライム＜青年＞4部作のテクスト分析と拡張された文脈的な診断を中心に」（ソン・ドンウク、許ヒョン、キ・スンヨン、金スジン、シン・ジュヨン、朴ジンヒョン、黄ギョンア、李ギヒョン）は、ヒューマン・ドキュメンタリーであるEBS＜ドキュプライム＞「2017時代探求青年」4部作のストーリーテリングの特性と社会文化的な含意について、「青年問題」との関係に着目しながら分析した。

3.『言論と社会』

⑴ 第26巻第1号 2018年2月

「欲望を推動するコミュニケーションの距離と嫌悪の日常化」（ユン・ハナ、金サンホ）は、嫌悪の属性が過去とは異なるものであることを明らかにし、女性嫌悪を含む嫌悪の文化全般を可視化させるものであった。「デジタル労働搾取と監視の商品化：オンライン・ターゲティング型広告についてのコミュニケーション政治経済学解釈」（金ヨンウク）は、オンライン・ターゲティング型広告を通じて、現代のオンライン・プロモーション社会で労働の搾取が、どのくらい隠密になされ、それは、いかなる方式で商品化されていくのかについて明らかにした。「女性映画監督の役割遂行過程と実践の構造：エントリー段階での経験を中心に」（金ソクヒョン）は、女性映画監督の「セルロイドの天井」、および、その不可視化について、彼女らへのインタビューを通じて検討した。「韓国デジタル・ジャーナリズムの社会的形成：デジタル・ニュースの商品化過程についての歴史的研究」（朴ヨンフム）は、韓国のデジタル・ジャーナリズムの歴史的形成過程についての分析を通じて、技術決定論を基盤とした支配的ジャーナリズム言説に対する代案的なアプローチを提供した。

⑵ 第26巻第2号 2018年5月

「インターネット管理権力、そして管理社会」（朴スンイル）は、管理権力という概念を提案し、

その必要性と有効性について議論した。「青年大衆として見た同時代の青年言説の展開様相」（李グァンソク、ユン・ジャヒョン）は、2000 年代末の≪ 88 万ウォン世代≫を皮切りに青年問題を扱った大衆書の主要な言説とトピックのトレンドについて分析した。

⑶　第 26 巻第 3 号　2018 年 8 月

「ポスト・トゥルース時代の無知生産の文化政治：加湿器殺菌剤被害事件についてのメディア報道分析を中心に」（金スミ）は、加湿器殺虫剤被害事件に関して、混乱と不確実性を媒介にして無知が生産され、これを通じて技術文化政治が構成・維持されるメカニズムに、言論が関与する様相と、その含意について明らかにした。「総合編成チャンネル時事トークショーの政治現実構成についての研究：TV 朝鮮（これが政治だ）と JTBC（政治部会議）についての階層的／機能的文化形式分析」（金ヨンビン、韓ヘギョン）は、総合編成時事トークショーが構成する政治現実について、ルーマンの階層分化形式と機能分化形式概念を用いて分析した。

⑷　第 26 巻第 4 号　2018 年 11 月

①　企画論文　韓国言論とポストメディア時代の展望

「ポスト・メディア時代の政治哲学：知識破壊の時代、政治の再起動」（朴ソンウ）は、新自由主義とポスト・メディア、そして、ろうそく革命の時代に強力に浮上する技術万能主義的視線について分析した。「オートマタ・メディア：AI メディアのコミュニケーション様式のための試論」（イム・ジョンス）は、人間と対話のための機械的論理構造に着目し、機械行為者―メディアのコミュニケーション様式について検討した。「5 月 19 日、女性は恵化駅で、どのように集まったのか :「不法撮影偏向操作」糾弾デモの議題化と組織化過程を中心に」（金ヘウォン、朴ドンスク、李ジェウォン、チョン・サガン、カン・ヘウォン、白ジヨン）は、「恵化駅デモ」を事例として、その議題化と組織化のプロセスを通じて、ポスト・メディア時代の社会運動が有する特性を考察した。

②　一般論文

「東京とソウルを結ぶ青年の危うい生」（李グァンソク）は、非正規職青年労働者の参与観察を通じて、「使い捨て」青年労働文化について分析した。

注

（1）　2017 年度の韓国。言論学研究の動向については、以下、参照。「韓国の言論学研究の動向」第 11 号、『ジャーナリズム＆メディア』、日本大学法学部新聞学研究所、2018 年 3 月